ベアリングズ事件再考

～シンガポール報告書とリーソンの告白～

一九九五年二月二七日に生じたイギリスの金融持株会社ベアリングズの事実上の倒産からすでに二年の月日が経過した。シンガポールの子会社ベアリング・フューチャーズ（BFS）のトレーダー、ニック・リーソンによる日経平均先物・オプション、日本国債（JGB）先物、ユーロ円金利先物を用いた不正取引が九〇〇億円を上回る巨額の損失を生み出して、デリバティブ取引に関わる巨額の損失事件として世界中の注目を集め、そのポジションの手仕舞のためにわが国の金融市場に衝撃を与えたことはまだ記憶に新しい。同年三月六日にはオランダの金融・保険会社ING グループによる買収によってとりあえず事態は収拾し、株式市場や債券市場への影響も予想されたほど大きなものではなかった。ベアリングズ・グループの監督責任を持つイングランド銀行は事件の発覚直後から調査チームを結成し、七月一八日には『ベアリングズ破綻の事情調査』と題する報告書を公表した。また、BFSの監督責任を持つシンガポール大蔵省もプライス・ウォーターハウスに事件の調査を依頼し、一〇月一七日には『ベアリング・フューチャーズ』と題する報告者が公表された。二月二三日から失踪していたリーソンは三月二日にフランクフルト空港で逮捕され、一一月二二日にシンガポールへ送還され、一二月二日に六年半の実刑を受けてシンガポールのタナ・メラ刑務所に服役中である。一九九六年二月二三日にはドイツで拘留中のリーソンの証言をもとにした著作が出版され、二つの報告書とともに事件の真相はほぼ明らかとなった。

事件発覚直後の状況とイングランド銀行の報告書についてはすでに本誌でそれぞれ取り上げているので、今回

はシンガポールの報告書とリーソンの告白から明らかになった事実を中心としてベアリングズ事件の真相について改めて考察する。[1]

シンガポール報告書の紹介

一九九五年三月九日、監査法人プライス・ウォーターハウスに所属するマイケル・リム・チョー・サン（Michael Lim Choo San）とニッキー・タン・グ・クァン（Nicky Tan Ng Kuang）は会社法セクション二三二に基づいてベアリング・フューチャーズの捜査官として事件の調査と報告をシンガポールの大蔵大臣によって依頼された。[2] 報告書は九月六日にシンガポールの大蔵大臣に提出され、イングランド銀行の報告書から約三カ月遅れて一〇月一七日に公表された。報告書によると、シンガポール国内ではＢＦＳと外部監査人の記録を閲覧し、四五人の証人に五六回のインタビューを実施、イギリス・日本・香港でもＩＮＧグループの協力によってベアリングズ・グループの関連会社や社員・元社員の記録を閲覧し、三六人の証人に六二回のインタビューが実施された。ただし、拘留中のリーソン容疑者とベアリングズ・グループのロンドンにおける外部監査人であるＣ＆Ｌロンドンへのインタビューは実現できず、イングランド銀行銀行監督局からＣ＆Ｌロンドンに対するインタビューの記録と書類の提供を受けたと記されている。

この報告書は本文一七章、付録二二からなり、合わせて一八三ページに及んでいる。そして冒頭には一一ページにわたる要旨（エクゼキュティブ・サマリー）が付されており、調査結果が要約されている。

第一章は「イントロダクション」であり、捜査官の任命、事務弁護士の任命、任命の背景、捜査の範囲、報告書の対象領域、報告書の構造、謝辞、という七つの節からなる。この章は文字どおり続く一六章の導入であり、

捜査の目的はＢＦＳおよびベアリングズ・グループの倒産に至る事実の再構成とその原因究明にあり、時間的な制約にため関係者の行動の評価は含まないと述べている。しかし、報告書を読めば明らかなように、イングランド銀行の報告書以上に関係者に対して厳しい指摘が随所に見られる。また、法的な制約のためにイングランド銀行捜査チームとシンガポール捜査チームの間での情報交換は非公式の限られたものであり、シンガポールチームのロンドンでのインタビューの記録をイングランド銀行チームは入手したが、Ｃ＆Ｌロンドンへのインタビューを除けばシンガポールチームはイングランド銀行チームのインタビューの記録を入手できなかったと述べている。これはイングランド銀行報告書が、シンガポールではＢＦＳとＳＩＭＥＸの一部の文書のコピーを除いては資料を入手できず、ＢＦＳの人間へのインタビューを行うこともＢＦＳの電話記録を入手することもできなかったと報告書の中で述べていたことに対応している。

第二章は「組織」というタイトルで、ベアリングズ・グループ、ＢＦＳの歴史的背景、リーソン氏のシンガポールへの派遣、自己売買の拡大、委託取引と自己売買、ベーカー氏と金融商品グループ、ソロ・コンソリデーションおよびベアリング・ブラザーズ（ＢＢ）とベアリング・セキュリティーズ（ＢＳＬ）の合併、資金繰り、ＳＬＫ支払誓約書、資産負債委員会（ＡＬＣＯ）、一九九五年二月、調査対象、という一二節からなり、事態の経過を概説している。ここで注目すべきことは、ＢＦＳのコンピューター・コンサルタントを勤めるウォン博士の証言によって、不正取引に用いられた８８８８８口座も他の口座と同様に開設当初はロンドンのＢＳＬにトレード・フィードを通じて転送されていたが、数日後、８８８８８口座の転送を停止するようにリーソンからプログラムの変更を頼まれていたことが明らかになったことであろう。

第三章は「リーソン氏の活動」というタイトルで、イントロダクション、トレーディング活動、８８８８８

口座、日経平均先物取引の拡大、ヘッジされていない日経平均先物・オプションのポジション、ショート・ストラドル、JGB先物取引の拡大、日中のヘッジされていない取引、「トランスファー」取引、価格調整、FCT、偽装「トランスファー」取引の記帳、証拠金のファイナンス、偽装取引の記録、送金請求、一九九五年一月から二月、88888口座の損失、リーソン氏による活動報告のコントロール、という一八の節からなる。ここで新たに明らかになったことは、

①一九九四年にリーソン氏に認められていた日中の自己売買のポジション上限は日経平均先物で二〇〇枚（SIMEXでは四〇〇枚）、JGB先物で一〇〇枚（SIMEXでは二〇〇枚）、ユーロ円金利先物で五〇〇枚であり、ヘッジされていないポジションの持ち越しは許されていなかった。[3]

②大阪証券取引所とSIMEXの日経平均先物の間での裁定取引と東京証券取引所とSIMEXのJGB先物の間での裁定取引がリーソン氏には認められていたが、ヘッジされていればポジションの大きさには制約がなかった。

③88888口座の最初の取引はBFSによるSIMEXでの取引開始二日後の一九九二年七月三日に行われており、それ以後定期的にこの口座は使われていた。

④一九九四年一二月三一日までに四七〇億円にのぼる日経平均先物オプションのプレミアムが888888口座で受領されており、この時点でも一七八億円のプレミアムがこの口座に入金されていた。

⑤一九九四年八月から一九九五年二月までの期間で、88888口座での日中のヘッジされていないポジションは、日経平均先物で八〇〇枚から一六二七六枚、JGB先物で七〇〇枚から五六〇〇枚に達していた。

⑥88888口座に記録された取引の大半は東京のベアリング証券（BSJ）かBSLの口座で開始され、リーソン氏の指導の下で二人のフロア・トレーダーによってSIMEXで取引終了三〇秒前にトランスファー取引を通じて888888口座に振り替えられていた。

⑦トランスファー取引の価格は後でBSJないしBSLが有利になるようにリーソン氏の指導に従ってライン・トレーダーによって価格が改竄されており、損失は888888口座に蓄積されていた。

⑧一九九四年七月から一一月までの間に、JGB先物の取引でリーソン氏によってFCTのアルギロポロス氏が有利になるように価格の改竄が六回行われており、逆にリーソン氏が有利になるような価格の改竄が五回行われていた。

⑨SIMEXのフロアでトランスファー取引が成立しなかった場合でも888888口座とBSJまたはBSLの口座の間で架空のトランスファー取引がBFSの取引リストに記録されていた。

⑩リーソン氏はしばしばBFSの清算業務担当者に架空の取引を記録させており、翌日の取引開始時に元に戻させていた。

⑪リーソン氏は架空の取引を記録することによって888888口座のポジションを過小に報告し、マージン・コールを軽減していた。

⑫リーソン氏は月末に銀行口座を動かして借り方に銀行受取基金がくるように清算業務担当者を指導していた。

第四章は「組織の構造」というタイトルで、BBとBSLの合併、グループ財務とリスク、マトリックス・マネジメント、ローカル・マネジメント、プロダクト・マネジメント、マトリックス・マネジメントの実際、フロントとバック・オフィスの兼任、不十分なコーディネーション、結論、という九節からなる。ベアリング・グループは地域ごとに指揮系統を統括するローカル・マネジメントと取扱商品ごとに指揮系統を統括するプロダク

ト・マネジメントによって二重に管理を行うマトリックス・マネジメントを採用していたが、BBとBSLの合併に伴って一九九三年後半からリーソン氏に対する監督が曖昧になり、リーソン氏に起因する問題を解決するための適切なコーディネーションが上級管理職の間で行われていなかった。

第五章「内部監査」は、BBとBSLの内部監査部門の統合、BFSの内部監査の準備、主要な問題、内部監査報告書、業務の分離、証拠金の一致、資金繰り、トランザクション・テスト、独立したリスク&コンプライアンス・オフィサー、結論、という一〇節からなる。ここで明らかになったことは、

①一九九四年の内部監査の前に、ベアリング・インベストメント・バンク（BIB）の財務担当重役アントニー・ホーズがBSLの内部監査担当者ジェームズ・ベーカーに対して、BFSのフロントとバック・オフィスの分離、特定できない顧客の証拠金を補填するためにロンドンからBFSへ資金が送金されている問題を指摘していた。

②内部監査報告書ではBFSのフロントとバック・オフィスの分離は取り上げられたが、証拠金請求額の確認はリーソン氏の反対によって最終版では削除されていた。

③内部監査報告書はBFSの外部監査人に公開されていなかった。

第六章「コンプライアンス」は、イントロダクション、レポーティング・ライン、内部監査との関係、フロント・ランニング、検査、結論、という六節からなり、リーソン氏はイギリス証券先物監督局（SFA）にディーラーとして登録しようとした際に民事の前科が判明し、登録申請を撤回していたにも関わらず、一九九二年七月のSIMEXへの申告ではこの事実を隠し、SIMEXへの登録が認められていたことが明らかになった。

第七章「リスク管理」は、イントロダクション、市場リスク、独立したリスク&コンプライアンス・オフィサー、ALCO、結論、という五節からなり、ベアリングズ・グループのリスク管理に関する常設委員会であるALCOは、一九九五年に至ってもリーソン氏に対して適切な指導を行えず、SIMEXにBFSの活動を全面的にバックアップするという書簡を送っていたことが論じられている。

第八章「清算」は、レポーティング・ライン、以前の清算に関わる問題、BFSの送金請求とロンドンでの確認、顧客の証拠金計算とマージン・コール、グレンジャー女史、不一致の発見、結論、という六節からなり、BSLの清算部門は遅くとも一九九四年七月までにBFSによる顧客のための送金請求が顧客の取引記録と一致していないことに気付いていたことが明らかになった。

第九章「グループ財務」は、イントロダクション、ソロ・コンソリデーション、内部監査、ミドル・オフィス、アジア地域財務担当者、証拠金の分類、シンガポール・プロジェクト、一九九五年二月のシンガポール訪問、検査、ホプキンス氏、という一〇節からなり、第一〇章「財務コントロール」は、ブロードハースト氏のベアリングズ・グループでのキャリア、ブロードハースト氏のグループ・ファイナンス・ディレクターとしての役割、ソロ・コンソリデーション、損益計算、資金繰り、一九九四年の外部監査の作成、結論、という七節、第一一章「信用コントロール」は、レポーティング・ラインと責任、ソロ・コンソリデーション、ソロ・コンソリデーション後、結論、の四節からなり、BFSないしその顧客のための送金が十分に分析されていればリーソン氏の不正取引はもっと早くに発覚していたはずであるとしている。

第一二章「金融商品グループ」は、ベーカー氏、東アジアにおける取引戦略、リーソン氏の評価、ミドル・オフィス・パーソンとその費用、リスク・レポーティング、結論、の六節、第一三章「監督機関への報告」は、イントロダクション、ソロ・コンソリデーションと報告要件の法的背景、ベアリングズ・グループの融資特権と財

務協定、不正確なＢＦＳへの融資報告、不適当な証拠金の報告、大口融資報告、という六節からなり、ベアリングズ・グループが三つの取引所に預託した証拠金が自己資本の二五％という大口融資規制をオーバーしていたにも関わらず、一九九五年二月一日までイングランド銀行からの注意はなく、なぜイングランド銀行がベアリングズ・グループの報告を黙認していたのかは不明であると述べている。

第一四章「内部監査」は、イントロダクション、ＢＦＳ外部監査人の責任、デロイト＆ツーシェ（監査のアプローチ、年末の作業、一九九三年の監査、デロイトによる監査からの発見）、Ｃ＆Ｌシンガポール（監査のアプローチ、七七・七八億円の不一致に関する監査活動、Ｃ＆Ｌシンガポールによる監査からの発見）、の四節からなり、Ｃ＆Ｌシンガポールによる一九九四年一二月の外部監査の際に発覚した七七・七八億円の不足金をリーソン氏がＳＬＫからの払い込みがあると説明したことに関して、銀行の送金通知状の送金主欄が改竄されて読み取れなかったこと、そしてその送金通知状に同じ日にほぼ同額の七八・七八億円の引き出しが記録されていたこと、ＢＦＳから受け取った取引記録とリーソン氏が捏造したＳＬＫの契約確認書では細部が食い違っていたことにＣ＆Ｌシンガポールが気付かなかったこと、などが明らかにされた。

第一五章「ＳＩＭＥＸ」は、先物取引、取引所、証拠金、監査・検査部（流動性の評価、取締検査、８８８８８口座）、市場監視部、法務部、ＢＦＳの倒産、結論、の八節からなり、ここで明らかになったことは、

①ＳＩＭＥＸによる監査の結果、顧客資金の不適切な分離や不適切な計算に関してＢＦＳがＳＩＭＥＸの規則と先物取引規制に五つも違反していることが判明し、一九九五年一月一六日にＳＩＭＥＸは文書での回答をＢＦＳに要求していた。

②８８８８８口座の月末バランスは虚偽の記載によって大抵ゼロまたは極めて小さな値に引き下げられていた。

③一九九四年一二月二八日にＳＩＭＥＸはＢＳＬの９９００１口座のサブ・アカウントと報告されている８８８８８口座のＳＰＡＮ証拠金計算レポートの提出をＢＦＳに求めたところ、９９００１口座の証拠金二・四二一億ドルと、ＢＦＳの提出したＳＰＡＮ証拠金計算レポートに基づいてＳＩＭＥＸが計算した８８８８８口座の証拠金三・四二一億ドルの間には一億ドルの食い違いが生じていた。

④ＳＩＭＥＸに報告されたポジションによると、ＢＦＳは日経平均先物・オプション合計の建玉上限一万枚を数回越えていたが、証拠金はきちんと預託されていたのでＳＩＭＥＸはＢＦＳにそのことを問いつめなかった。

⑤一九九五年二月二二日、ＢＦＳの二人のトレーダーがＳＩＭＥＸの規則に反して互いに取引を行っていることをＳＩＭＥＸのフロア法務部が発見し、翌二月二三日にリーソン氏を召還して説明を求めたが、十分な説明がえられなかったので、ルール五一三違反とし、二月二四日に文書でＢＦＳに通知していた。

第一六章「スペア・リーズ＆ケロッグの支払誓約書」は、イントロダクション、第一バージョン、第一バージョンに対すロンドンの理解、第二バージョン、ジョーンズ氏の反応、ロンドンでの更なる議論、シンガポールでの監査活動、第三バージョン、第四バージョン、一九九五年二月三日、第四バージョンが有力に（ホプキンス氏、ベーカー氏、一九九五年二月八日のＡＬＣＯ会議）、監査人によるマネジメント・レター～第五バージョン、第六バージョン、一九九五年二月一〇日、一九九五年二月一三日のＡＬＣＯ会議、バックス氏の証拠、ノリス氏の証拠、推理と調査結果、という一八節からなり、リーソン氏がＣ＆Ｌシンガポールに説明したスペア・リーズ＆ケロッグ（ＳＬＫ）からの受取資金をめぐってベアリングズ経営陣の間でさまざまな議論が行われたことが詳細に論じられている。報告書によれば、ベアリングズの最高経営責任者であるピーター・ノリスがＳＬＫにまつわる事件の隠蔽工作を謀り、外部監査人によって明らかにされた取引の重要性を軽んじ、外部監査人を含めて当該

取引に対するあらゆる調査を妨害し、この件をよく知らない者には取るに足りない問題だと思わせ、リーソン氏に対するいかなる処分も回避しようとしていた。なぜならば自分が作り上げた新体制の中でリーソン氏が上げる利益は重要な位置を占めるので、なんとかこの収益源を保持したいとノリス氏が考えていたからに違いないからであると指摘している。

第一七章「倒産直前の出来事」は、イントロダクション、帳簿の不一致、不一致を解消しようとする努力、一九九五年二月二三日、ロンドンの反応、一九九五年二月二三日深夜から二四日早朝、一九九五年二月二四日、一九九五年二月二五日、倒産、の九節からなり、以下のような事実が明らかになった。レイルトン氏がBFSの清算業務を監視するために派遣され、一九九五年二月一七日にBFSに送金された資金が一四〇億円不足していることを発見し、リーソン氏に調査の協力を要請したが、体の不調を理由に作業は先延ばしとなった。リーソン氏が行方をくらませた二月二三日の晩、ジョーンズ氏がSLKの支払誓約書がリーソン氏の自宅からFAXされていたことを発見し、ロンドンへ報告した。翌二月二四日未明に駆けつけたホーズ氏、バックス氏、レイルトン氏によって88888口座が資金紛失の原因であることが発見され、ロンドンでリスク・レポートをチェックしていたブロードハースト氏とサクラニー氏によって非公認取引によるものという見方が固まった。二月二四日の朝にはタイのプーケットで誕生日を祝うために休暇を取るというFAXがトレーディング・フロアで発見され、午後三時過ぎには辞職を申し出るリーソン氏のFAXがクアラルンプールのリージェント・ホテルからBFSに届いた。二月二五日、ノリス氏の指示に従ってバックス氏が事態をイングランド銀行に説明した。

報告書は冒頭の要旨の中で、次のように厳しく経営陣の責任を追及している。ベアリングズ・グループの経営陣が88888口座のことを実際に知っていたかどうかは問題ではない。例え知らなかったとしてもポジションを調査するための何らかの措置を講じていればそれに気づいていたはずである。倒産に至るまで気づかなかったとしたら真実から目を背けようとしつづけたと言わざるを得ない。

リーソンの著作の紹介

一九九五年一〇月一四日、ベアリングズを倒産に追い込んだニック・リーソンの著作の版権がイギリスの出版社リトル・ブラウンによって四五万ポンドで落札された。[4] 執筆はロスチャイルド銀行に勤務していたジャーナリストのエドワード・ウィットトレーの協力によって進められ、一二月二日のシンガポール法廷での判決をまって、一九九六年二月二三日、くしくもシンガポールからの逃亡一年後にロンドンとニューヨークで発売された。[5]

リーソンの著作の表題は『ローグ・トレーダー（いかさまトレーダー）』で、これはイギリスの大蔵大臣が事件発覚直後に下院で彼をこう呼んだことに由来している。[6] 構成はプロローグと一一章からなり、一章から九章までがロンドンでの生い立ちから逃亡まで、プロローグがコタ・キナバルでの逃亡生活、一〇章が逮捕、一一章がドイツでの拘置所生活となっている。

まず、イングランド銀行報告書やシンガポール報告書では見られないリーソンの生い立ちを簡単に見ておこう。ロンドン郊外ワトフォードに左官工の長男として生まれ、一八歳で高校中退、一九八五年にクーツ・アンド・カンパニー銀行に小切手処理係として勤務、一九八七年六月にモルガン・スタンレーに先物・オプション部門の事務処理係として勤務、そして一九八九年七月一〇日、ベアリングズに先物・オプションの事務管理部門スタッフとして入社（年棒二万ポンド）、九カ月後にはジャカルタで株券の整理に当たる。このとき、ロンドンから派遣されてきたリサ・シムズに出会う。一九九一年三月にロンドンに戻り、一九九二年三月にリサ・シムズと結婚、

そしてBFSの責任者となる。

次いで、著作の中で明らかにされた新事実を以下に列挙する。

①SIMEXで業務を開始したとき、99905というエラー・アカウントを作り、そこにミスを入れていたが、デリバティブ事務管理部門の責任者であるゴードン・バウザーから電話があり、もう一つエラー・アカウントを作ってシンガポールで持っていてくれないかと言われて作ったのがエラー・アカウント88888（ファイブ・エイッ）であった。何週間かしてロンドンのゴードン・バウザーから再び電話があり、新しいコンピューター・システムを導入して十分対応できるようになったからエラー・アカウントがまっすぐロンドンへ来るように戻してくれと言われ、88888口座はすぐに休眠状態になった。

②一九九二年七月一七日金曜日、新入りのキム・ウォン（年棒四〇〇〇ポンド）が富士銀行の日経平均先物三月限二〇枚の買い注文を誤って売ってしまい、二万ポンドの損失を出す。七月二〇日月曜日、キム・ウォンは辞職し、取引終了後に88888口座に四〇枚の売りを入れ、富士銀行を二〇枚の買いポジションに変更。三日後に市場は二〇〇ポイント跳ね上がり、損失は六万ポンドに拡大。一九九二年末までに三〇以上のエラーを88888口座に入れるが、まだ破滅的というほどではなかった。BFSのトレーダー達はエラーを犯した場合にはそれが88888口座に入ることを知っていた。

③SIMEXの理事長アン・スウィー・チャンの紹介によって、バハマに本拠を持つヨーロピアン・トラスト・アンド・バンキング・カンパニーのフィリップ・ボヌフォイの注文を執行することになる。[7] ジョージ・ソロスを除けば誰よりも多くの日経平均先物を取引しているはずだとボヌフォイは豪語した。BFSの巨大なポジションはヘッジファンドのものではないかというヘッジファンド説も全くの的外れではなかった。BFSはボヌフォイの巨額の注文をSIMEXで執行することによって次第に評判を高めていくことになった。

④一九九三年になって88888口座の損失を手数料収入や顧客の資金で埋め合わせることは不可能になり、日経平均先物オプションの売却による円資金で変動証拠金の支払いをすることになった。SIMEXでは当初証拠金は円でもドルでもかまわないが、変動証拠金は円で支払わなければならなかったので、顧客資金の立て替えとしてロンドンからドルを送金させることはできても円を送金させることは難しかったからである。

⑤一九九三年七月に市場が急騰すると88888口座の六〇〇万ポンドの損失は一時は利益へと変わったが、その状態も長くは続かなかった。ボヌフォイから日経平均先物コール・オプション六五〇〇枚のロールオーバーを獲得するために無理をし、一二万五〇〇〇ドルの損失と五〇〇枚のコール・オプションを88888口座に押し込むはめになった。

⑥一九九三年度のベアリングズの利益は税込みで二億ポンド、リーソンの上げた利益は一〇〇〇万ポンド以上であったが、88888口座には二三〇〇万ポンドの損失が隠されていた。一九九四年二月、リーソンは一三万五〇〇〇ポンドのボーナスを受け取り、フロア・トレーダーに一八カ月分、バック・オフィスのスタッフに一二カ月分のボーナスを支払った。

⑦一九九四年七月の内部監査の時点で約五〇〇〇万ポンドの現金がバランス・シートから消えていたが、帳簿操作によってシティバンクに預金残高があるように見せかけて内部監査をしのぐ。内部監査報告書の草案では架空の取引に基づく証拠金請求がなされる可能性があるとして、日々の証拠金要請額が一致していることを確認する必要があるとされていたが、途中で週ごとの一致でも良いことになり、最終的には月ごとの一致で良いことになった。また、報告書はフロント・オフィスとバック・オフィスを同一人物が監督しているという問題を

指摘していたが、BFS専任の担当役員を置くことは見送られ、香港のゴードン・バウザーが年に4回監査を行うことになった。

⑧ロイターのアロイシウスとバーに飲みに行き、シンガポール航空のスチュワーデスに尻を見せたという罪で逮捕される。最悪の場合実刑一年であったが、最終的には微罪に軽減される。[8]

⑨一九九四年末には88888口座の損失は一億七〇〇〇万ポンドに膨らんでおり、七七億八〇〇〇万円の現金が不足していた。この時点では88888口座に国債やユーロ円のポジションはなく、日経平均先物買い建て一〇〇〇枚と日経平均先物オプションのショート・ストラドルだけであった。

⑩神戸震災から二日後の一九九五年一月二〇日金曜日、地震の前から二〇〇ポイント低いところで日経平均先物三月限を一万枚買い建てたが、一月二三日月曜日に市場は八〇〇ポイント下落した。一月二七日金曜日までに三万枚近くの先物を買い増した。

⑪一月二三日、監査法人C&Lシンガポールから七七億八〇〇〇万円のSIMEXからの受取が見当たらないという質問を受け、一二月にSLKとBSLの間で行ったOTC取引がコンピューターから抜け落ちたという言い訳をし、C&Lシンガポールから連絡を受けたサイモン・ジョーンズには取引はSLKとBNPの間で行われ、コンピューターのミスでSLKではなくベアリングズがBNPに支払をすることになったと報告。二月二日、C&Lシンガポールの要求に従って、七七億八〇〇〇万円を支払うというSLKの確認書、七七億八〇〇〇万円を受け取ったことを示す銀行残高の一覧、ロンドンのロン・ベイカーによる取引承認覚書を偽造し、自宅からオフィスへファックスを送った。

⑫二月三日、いくらかの先物の売りをシステムに記入し、88888口座の最近の買いとのバランスを取り、SIMEXのコンピューターにSIMEXがBFSから余分な証拠金を受け取っているという操作を行った。

⑬二月八日から一〇日にかけて、JGB先物を一万枚売り増して二万枚の売り建てとし、日経平均先物を二万五〇〇〇枚買い増して五万五〇〇〇枚の買い建てとした。すでにロンドンから一億ドルの送金を受けていたが、さらに四五〇〇万ドルの送金をSIMEXの臨時証拠金という名目でロンドンのブレンダ・グレンジャーに依頼し、了承された。

⑭二月一六日、ベアリングズの最高経営責任者ピーター・ノリスがシンガポールを訪問し、リーソンはオフィスに呼び出された。部屋へ入るとノリスは電話中で二〇分間待たされた。ようやく電話が終わり、会話を交わすまもなく別の電話が入り、再び五分間待たされた。ノリスはポジションの状態を訪ね、大丈夫だという返事に満足していたところへまた電話が入り、話はこれでお仕舞いだった。

⑮二月二三日、日経平均株価は下がり、JGB価格は上がっていたが、日経平均先物を六万一〇三九枚買い建て、JGB先物を二万六〇〇〇枚売り建て、さらにユーロ円先物と日経平均先物オプションを持っていた。ついに逃亡を決意し、エスケイプという名前の飲み屋からLIFFEでJGB先物を扱っているタレッツのウィロウに電話をして、損失が少しでも少なくなるように六月限へのロールオーバーを二〇〇〇枚注文した。

⑯二月二三日の夜にクアラルンプールに到着し、リージェント・ホテルにチェックイン。翌朝、プーケットに向かおうとしたが、飛行機が満席のためブルネイに接する東マレーシアのコタ・キナバルへ変更し、シャングリラ・ホテルに宿泊。日経平均株価が三〇〇ポイントしか下げていないことを知り、事態がうまく収拾したと勘違いして、週末は休暇を取る。二月二七日月曜日の朝、妻はシンガポールへ帰り、荷物の整理をしてプーケットで合流するつもりであったが、ベアリングズの倒産を知り、ロンドンへ行き先を変更。翌朝のブルネイ行き

飛行機のキャンセル待ちをしたが、切符が得られず、ハイアット・ホテルに移動。最も早くヨーロッパに着く便を探し、翌日のブルネイ、バンコク、アブダビ経由のフランクフルト行きに搭乗。三月二日、フランクフルトで逮捕。

⑰イギリスの重大不正捜査局はすべてを話すと提案していたにも関わらず、ロンドンへ引き渡されなければ黙秘すると言っていると発表し続けた。九月一三日、重大不正捜査局はシンガポールこそリーソンを裁く最良の場所であるとして捜査から手を引いた。その後、ベアリングズの永久社債保有者がイギリスの裁判所で訴訟しようとしたが、重大不正捜査局は公共の利益に反するという理由で訴訟を差し止めた。

⑱七月一八日に発表されたイングランド銀行の報告書は嘘を連ねた紙の無駄使いであり、いかなる意味でも同意できない。88888口座の取引のみを取り上げており、損ばかりが積み上がっているように見えるが、実際は日本との他の取引を通じて利益も上げていた。

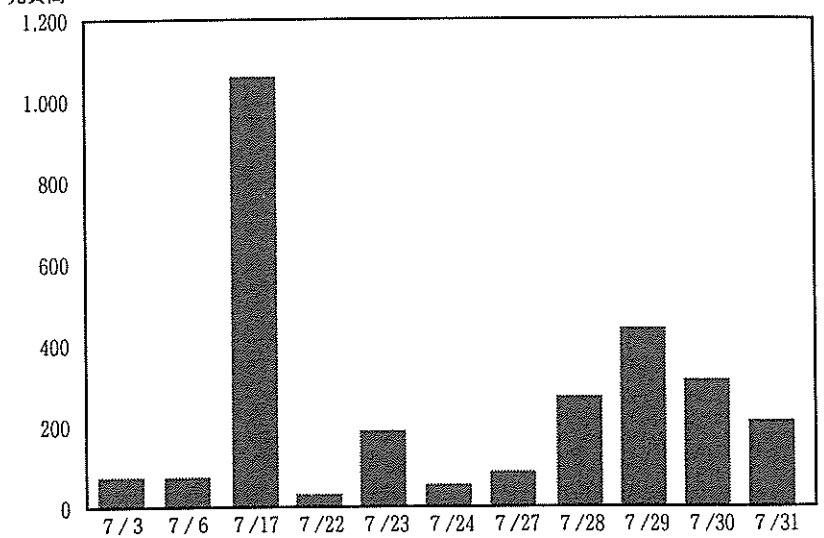
⑲一〇月一七日に発表されたシンガポールの報告書はベアリングズの管理体制を厳しく批判しており、高く評価できるが、一九九二年に偽造を行っていたことを示す奇妙な脚注には同意しかねる。さらにこの報告書はイギリスにある大半の証拠書類に近づくことを禁じられたとしているが、これはフランクフルトで重大不正捜査局から聞いた情報と全く矛盾している。

事実の照合

以上でシンガポールの報告書とリーソンの著作から新たに明らかになった事実を列挙したが、ここではイングランド銀行の報告書を含めて三つの文献の整合性を照合しながら、事実の再構成を試みよう。

まず、事件の張本人ニック・リーソンについては、彼自身の著作を通じて見る限り、極悪非道というよりも罪の意識に苛まれたごく普通のトレーダーといった印象を持つが、彼の書いていることが本当に事実なのか、あるいは誇張したり、意図的に都合の悪いことを隠してはいないかという疑問が残ることは事実であろう。猥褻物陳列罪で逮捕された事件や方々で馬鹿騒ぎをやっていたことは書かれているが、SFAにディーラーとして登録しようとした際に民事の前科（個人破産）が判明し、登録申請を撤回していたにも関わらず、SIMEXへの申告ではこの事実を隠し、登録が認められていたことについては何も触れてはいない。また、一九九二年七月二〇日に初めて88888口座を不正に使用したのは部下が過ちを犯した日経平均先物二〇枚（往復四〇枚）だと主張しているが、シンガポールの報告書によると七月二〇日に88888口座の取引は記録されておらず、七月一七日には一〇〇〇枚以上の取引が記録されていた。さらにコンピューター・コンサルタントの証言によれば、不正取引に用いられた88888口座も他の口座

図1　1992年7月の88888口座におけるSIMEX日経平均先物売買高



（出所）シンガポール報告書、Appendix 3A

と同様に開設当初はロンドンのＢＳＬにトレード・フィードを通じて転送されていたが、数日後、８８８８８口座の転送を停止するようにプログラムの変更を頼まれたことが明らかになっているにもかかわらず、このことについても全く触れられてはいない。したがって、リーソンは自らが不利になることはできるだけ伏せようとしている形跡があり、彼の証言は割り引いて見る必要があるだろう。

次に、イングランド銀行および重大不正捜査局の態度は、リーソンが盛んに述べているようにベアリングズの経営陣に対して寛容で、自分たちもこの事件を未然に防止できなかったという責任の一端があるせいか、歯切れが悪い。それに比べると、シンガポールの報告書は経営陣の責任問題に関しては歯切れが良い。国際的な市場の評判を守るために事実の公表を極力回避するのではないかと心配されていたが、出来上がった報告書は予想に反して厳しい姿勢で事実の解明に取り組まれていた。ＳＩＭＥＸに関しても監督責任の一端があるとの姿勢は自国の問題を特別視せずに取り扱ったという意味で評価できるが、ＳＩＭＥＸの証拠金口座は欧米諸国と同様に顧客口座を分離していると説明しながら、８８８８８口座の不正取引入力によって証拠金請求が削減されていた（顧客口座どうしのネッティングが行われていた）ことは見逃していたようである。また、リーソンの著作によれば、フィリップ・ボヌフォイを紹介したのはアン・スウィー・チャンＳＩＭＥＸ理事長（当時）とのことであるが、シンガポール報告書はアン・スウィー・チャンやシンガポールの市場関係者にインタビューを行っていたにもかかわらず、このことは報告書では触れられてはいなかった。

他方、ベアリングズの経営陣がＢＦＳの送金要求に対して、厳格な審査も十分な確認もせずに、要求されるがままに送金し続けていたことは驚くべきことであった。ロンドンからの送金を担当するブレンダ・グレンジャーやトニー・ホーズは増大し続ける送金要求に不安を持っていたが、ロン・ベイカーとメアリー・ウォルツがベアリングズの稼ぎ頭と目されていたリーソンを支援し、ピーター・ノリスもリーソンの活躍を自ら作り上げた新体制の成果として必要としていた。ベアリングズの内部監査や監査法人による外部監査の不徹底ぶりはいずれの文献からも明らかであるが、ロンドンのベアリングズ本体の監査においてピーター・ノリスがＳＬＫ絡みの問題をもみけそうとしていたことがシンガポールの報告書から明らかになった。シンガポールの報告書によると、二月一六日にノリスがシンガポールを訪れた際にリーソンと一時間以上話し合ったという関係者の証言と五分程度会話をしたにすぎないというノリスの証言は食い違っていたが、リーソンを部屋に呼んでおきながら他の電話にかかりきりであったというリーソンの証言で辻褄はあう。

最後に、リーソンがなぜ神戸震災後に急激にポジションを膨らませたのかという問題については、日経平均株価の値下がりによって大量のショート・ストラドルから生じる損失を被ることを回避しようとしたからであり、なぜ大量のショート・ストラドルのポジションを持ったのかといえば８８８８８口座のマージン・コールを円で支払わなければならなかったからである。リーソンにとっては神戸震災が最後のチャンスであったわけであるが、リーソンの証言によれば一九九四年末にシンガポールからロンドンへの逃亡をすでに考えており、そうしていたならばベアリングズの倒産という事態は回避されていたであろう。

二つの報告書とリーソンの著作を通じて新聞紙上等で報じられてきたことの多くは確認され、これまでに知られていなかった新たな事実も判明した。これらを照合してみると、当事者の告白は貴重であるが、その裏付けとなる資料の収集なしには無条件で信用するわけにはいかない。その意味でイングランド銀行の報告書とシンガポールの報告書は事件の解明にとって非常に有意義であった。その後に生じた大和銀行ニューヨーク支店事件や住友商事銅取引事件についても同様の報告書が作成されることを期待する。

（吉川）

注

(1) 事件直後の状況については「ベアリングズ・ショックの教訓」(本誌第一五二二号、一九九五年五月)、イングランド銀行の報告書については「ベアリングズ事件の真相～イングランド銀行報告書の検討～」(本誌第一五二六号、一九九五年九月)を参照。

(2) Michael Lim Choo San and Nicky Tan Ng Kuang. *Baring Futures (Singapore) Pte Ltd: The Report of the Inspectors Appointed by the Minister for Finance*. October 1995.

(3) 一九九五年一月二七日のALCOの決定により、日経平均先物とJGB先物の日中のポジション上限はともに五〇〇枚(SIMEXで一〇〇〇枚)に引き上げられた。

(4) Dan Atkinson. "LEESON SELLS STORY FOR POUND450.000". *The Gardian*. October 14. 1995. "Leeson trades in his story for £450.000". *Daily Mail*. October 14. 1995.

(5) "EX-BARINGS BANKER BRINGS OUT BOOK FROM HIS JAIL CELL". *The Plain Dealer*. February 27. 1996.

(6) Nick Leeson with Edward Whitley. *Rogue Trader: How I Brought Down Barings Bank and Shook the Financial World*. Little Brown and Co. 1996 (ニック・リーソン『私がベアリングズ銀行をつぶした』一九九七年、新潮社)

(7) ただし、清算業務はフランスのソシエテ・ジェネラル銀行系のFIMATを通じて行われた。

(8) この事件に関してはシンガポールでは評判であったようである。"Barings'bottom line". *International Financing Review*. Issue 1071. March 4. 1995.